倉沢里山を愛する会 会報

ENJOY アリスの丘 風の丘 Farm
NEWS LETTER

倉沢里山を愛する会
アリスの丘ファーム
会　報
NEWS LETTER No.61
2012(H24)年　春号
2012年4月1日発行
発行責任者　峰岸純夫
〒191-0033
東京都日野市百草698-6(田村)
TEL/FAX（042)592-5859
Email: info@alice-fm.info
URL: http://alice-fm.info

まちづくりと市民活動

日野市役所企画調整課　井上明日香

市の今後のまちづくりについて検討する材料として「倉沢里山を愛する会」の活動のお話しを是非伺いたい、と２月に田村裕介さんにお願いをさせていただきました。田村さんに連絡差し上げたところ「では活動の様子も見に、万蔵院台緑地の炭焼き小屋へ来てください。」と快くお話しを受けていただきました。

当日、場所が分かるかしら、と落葉の坂を上るとそこかしこに落葉をかく人の姿が。突然の闖入者に嫌な顔一つせず、作業の手をとめ田村さん夫妻を紹介していただきました。

市民２名と職員１名で里山にお邪魔してまず感じたのは里山の明るさです。冬の林床のため木々の葉が光を遮らないというのもありますが、里山全体に手がかけられ下草も管理され、天気の良い冬の暖かい陽光がふんだんに差し込む実に開放的な空間でした。

そして次に活動されている方の明るさです。その日は林床の落葉を集め「落葉堆肥づくり」の作業をされていました。広い林を、熊手を手に作業されている様子は一見する以上に大変そう。けれど皆さん汗をかき楽しそうに作業されていました。作業後にはローリエの香りただようミネストローネと参加者の差し入れの手作りコンニャクのお昼でした。見学に来ただけの私達にも気兼ねなくふるまっていただき、皆さんで木の株に腰掛け談笑しつつ、まさに「一つ釜の飯」を美味しくいただきました。

地域のボランティアの皆さんのご努力で保たれているこの里山ですが、希少種の息づく大切な場でもあるそうです。地面をよく見ると２列に杭がうたれており、人の行き来を優しく誘導するように道がつくられていました。大勢のボランティアが参加・作業する場ではあるけれど、人が踏み込み過ぎず、里山の植物が痛まず細くひそやかに息づけるようになっており、そのような人と山の絶妙な間隔の按配に驚くばかりでした。

田村はる子さんが「ボランティアの方々と一つの家族のように過ごせるのが楽しい」とおっしゃるように、倉沢の里山が地域の人が作業を通して温かく交流する場であり、また、人と里山の植物が共生する貴重な場でもある、日野市にとってかけがえのない場であることを拝見させていただきました。

里山の植物誌（60）

キブシ（キブシ科）

南百草園住宅から百草園駅に向かい百草園料金所を過ぎると道路の右側に長い穂状の薄黄色の花が垂れ下がっていました。何年かその花で早春の息吹を楽しみましたが、住宅化で消失、残るは帝京グランドの斜面の群立ちして頭上から垂れ下がっているのと長久保緑地から倉沢に向かう道の２か所になりました。前者は私たちの管理でもなく、いつの間にか株ごとなくなってしまいましたが、後者については小枝をもらい、庭で挿し木にしました。発根したのでもともと自生していた道路を挟んで反対側に植えたのが大株になって毎年３月中旬には花を咲かせています。１字違いのコブシのようには関心をもたれないかもしれませんが、簪（かんざし）にしてフラガールに踊ってもらったら喜ばれると思います。

今私たちは長久保緑地を雑木林として再生するように活動していますから、今年はそれを挿し木して戻すつもりです。旧来の土地のＤＮＡをしっかり持ったキブシが再び咲く日は遠くないでしょう。これを書くにあたり雌雄別株と判明、残し方を考慮する必要もわかりました。長久保緑地にはアブラチャンの雌雄が多く、リンドウもあちこちにありましたが最近は見当たりません。私たちが管理し始めてから３年になりますが慙愧に堪えません。

学名は穂状の尾で早咲きの意味を持ち、和名のキブシは果実に含まれるタンニンが黒色染料「五倍子（フシ）」の代用になることから。またキフジ（木藤）ともいい、４弁・釣鐘状の花が集まり、藤のように垂れ下がって咲くことから。

今年の開花は遅れるでしょうが、ニュースレターが発行される頃には開花しているでしょう。（峰岸立枝）

東北へ

秋葉　榮一（新入会員）

小雨降る飯田橋の駅を降り、東京災害ボランティアネットワークの事務所に向かう。着いてみると明るく声をかけてくる人がいた。会員の川添さんであった。先日の倉沢里山を愛する会の活動日の朝礼での紹介を覚えていてくれたようであった。この人の明るさと元気は、活動の最後まで衰えることはなかった。心身ともにタフな人に出会えたのは幸運であった。他に学生が３名という少人数で宮城県登米市へ向かった。（やはり支援活動は下火になっている・・・。）バスの中で見ていて、この頼りなさそうな若者と老人が上手くチームとして活動できるのか、一抹の不安をおぼえる。着いた翌日現地スタッフの案内で南三陸町の防災センターの前に降り立つ。ガランとしてしまった街全体を見渡し、ボー然として若者たちも声がない。駅らしい所も建物の痕跡が殆ど無く、言われなければ通り過ぎてしまうような状態であった。沈下してしまったこの街を１０年かけて７ｍ嵩上げするというが、可能なのだろうか・・・？

次に津波に直面した戸倉小の子ども達が保育園の子の手を引いて避難した現場へ向かった。そこは学校の裏の切り立った丘の上にある神社だった。当日避難した大人たちが崖の上から津波の様子を見ていて、その崖の上も危険ということで、全員で神社の最上段まで避難し一夜を明かしたというところである。小雪が舞う日だったので、幼児と老人だけが社の中に入り、他の人は周囲の雑木を燃やして暖をとったそうだ。社の中では恐怖に震える幼児達を保育園の先生方が歌を歌ったりして必死に励ましたいう。崖の上に立って当時の状況を想像すると絶句してしまう。

周囲を見渡すと、当日津波が押し寄せたあたりまでの杉木立が茶色がかって枯れていた。山の保全活動に携わっている者としては痛々しく目に残る。これも他者が支援と称して介入すると地元の自立の妨げになるとのことであった。

最後に横山不動尊へ寄った。被害にあってから２日後、南三陸町の人々が徒歩で横山峠を越えて大勢たどり着いたとのことであった。多くの人がほとんど食べ物を口にしていなかったので、檀家総出で炊き出しに対応したということであった。ここはボランティアにとっては毎日の活動の最後に寄る心のオアシスであったが、いつも地元の人が寄り添っており、地域の心の支えになっていることがよく覗えた。

実際の支援活動の内容は省きますが、倉沢里山を愛する会の募金活動のように、支援にも様々な形がありますが、体力に余裕のある人は是非現地を五感で実感してみて下さい。終わりに不安のあった若者との活動は、その意識の高さに感心し、有意義な時間を共有することができました。

倉沢里山と北海道の雑木林事情

NPO法人苫東環境コモンズ　事務局　草苅　健

今年２月３日、田村事務局長ご夫妻に倉沢里山をご案内していただき、経緯や現状について種々貴重なお話を伺うことができました。課題の質も量も違うとはいえ、北海道の私たちが抱える人と土地の問題を考えるうえで大変参考になる取り組みに、実際に目で触れることができたことは大きな収穫でした。特に、取り組みを進めるうえで、周りの方々や行政と丁寧な話し合いを重ね、前向きなまさに熟議の結果、今日の姿に至ったことには感動すらしました。その営みの丁寧さは、里山の風景に、如実に反映されていました。

私が関わっているフィールドは7,000年前は海だった勇払原野というところで、札幌の南方50kmほどです。広大なサロベツ原野などに比べれば、小規模で住宅や工業、農業の開発が行われたＢ級の湿原、原野ですが、ここに北海道では珍しい里山的なコナラのまとまった雑木林があり、それが一万ﾍｸﾀｰﾙの工業基地の緩衝緑地などになっています。炭焼きなどに使っていた萌芽再生林ですが、面積が広すぎ、放置しても消滅はしないことから、平成１０年頃からは所有者の経営破綻なども加わって、ますます管理の手が届かない荒れたものになっていました。

関係する北海道庁も苫小牧市ほか自治体も当初計画では緑地管理の主体になるはずだったのが、無償譲渡も拒否し管理主体にはならず、ずるずると民間会社が塩漬け状態で所有する状態が続いていたのです。国のプロジェクトで便宜上土地を所有する法人が、管理能力まで持つのは事実上無理なことは明白で、その一方にはその空間の価値を認め利用したい地域住民がいるというのも、道内各地で共通しています。

また、地域の高齢者が田畑や山林を手放す状態もそれと似ています。最近ではそこに中国系資本が森林買収を始めているという問題もありますが、私たちは、そのような土地に新しい「環境コモンズ」という概念を持ち込み、工業基地の所有会社と協定を結んで、”ＷＩＮ－ＷＩＮ”（双方にとってメリットがある）の管理を始めたところです。そして地域の人が利用できる環境に代えて行きます。今は７０ﾍｸﾀｰﾙの里山のほか、英国風のフットパスのある採草地、鬱に悩む人が散歩に来るコナラ林３０ﾍｸﾀｰﾙなど、広大な基地の中にいくつかフィールドが点在しており、課題も作業もさまざまです。

このようなとりとめもない面積と課題満載のフィールドですが、倉沢里山を愛する会の精神の一端を心にとめて、丁寧で楽しい土地と人の関係を紡いでいきたいと考えています。これを機会に久しくお付きあい頂ければ幸いです。

http://houmepage3.nifty.com/hayashi-kokoro/

しあわせ続けよう

杉本　研士

四十五十は洟垂れ小僧　　六十ようやく根が生えて
七十八十働き盛り
九十迎えの死神に　しばらく待てと言ってやる
百になったら　たらふく飲んで
ある朝めでたく　ピンコロリ

この冬の最中の活動日の一日、木枠の中に腐葉土を仕込む作業に加わった。ブルーシートにくるまれて運ばれてくる枯葉を、四･五人で踏み固める。ふかぶかと沈み込むので、膝を高く上げなければならない。幼い頃、ボクリボクリと田起しをしている木曽馬の姿をよく見たものだった。そんなことを思い出しながら、自分も輪を描くようにして踏み続けた。

立ち止まって息を整えていると、「大丈夫ですか」と若い人に聞かれた。「多分、あなたの倍は生きているからね」「へぇー！」「でも、こういうことがありますよ」･･･ということで、「ピンコロの歌」というのを披露した。すると私と同じ年頃と見られる方が、「そりゃ良い。一度で憶えられないから、こんどニュースレターに載せてください」と言われる。百歳を越えられた人には失礼にあたるところがあるかもしれない。方々は生きる達人なのだから、そんなことは歯牙にもかけないということで勘弁願って、ともあれ約束のとおり、以下どうぞ・・・。

里山を愛する人々

人々のふれあい

倉沢万歳院台緑地は、里山を愛する会が日野市との保全パートナーシップ協定にともなってボランティア活動によって維持しています。倉沢里山を愛する会では、倉沢地区の山や周辺の緑地で活動しています。まず、木や雑草をある程度残しつつも切ります。植物はある程度残しておかないと、自然のバランスがくずれて共存できなくなるので手入れも大変なんだそうです。会員の方は、東日本大震災の被災地支援バザーや、里山を愛する会が維持しているアリスの丘で柿の収穫などミいろいろな活動をしています。つい最近では緑地の落ち葉掃きなどがあったそうです。その他にも楽しい活動があります。草刈りなどをした後には、みんなで野菜などをもちより、カレーやスープを作って食べたりします。それが数多くあるみりょくの一つでもあります。日野市以外の市からも会に入っている人がいて、たくさんの人たちがふれあえるのも大きなみりょくの一つです。

（久保田　ひな）

歳の差は75歳

里山を愛する会は平成12年に結成してから、12年たちます。そんな里山を愛する会は結成当時10人もいませんでした。「3年でなくなる」と言われたそうです。今では、日野市最大級の大きさになりました。一回の活動で五十人ぐらいが参加するそうです。家族単位で登録するので、百二十六家族、二百人くらいが登録しています。一番年上の方は八十歳で、一番小さい子で5歳です。なんと、年の差は七十五歳！おじいちゃんと孫みたいですね。里山を愛する会のお々は年に四回春、夏、秋、冬に会報を出しています。約四ページの会報です。二000年の五月から始めた会報は結成十年を記念してそれまで書いた会報をまとめて一冊の本にしました。「緑の風は永遠に」という題名の本です。No1の会報からNO53までの会報がのっています。ちなみに今はNO60です。里山を愛する会で活動した内容や動植物のことなどが分かりやすく書かれています。とてもおもしろいのでぜひ見てください。

（岡田　梨恵）

四ヘクタールの管理

私達は「倉沢里山を愛する会」を取材してきました。「倉沢里山を愛する会」は、約四ヘクタールの土地を管理しています。昔は、この辺りにはもっと多く田んぼや畑があり、自然が豊かでした。しかし、農業を営む人が減ってくるて、それまで畑や田んぼとして利用されてきた土地は売られ、住宅地などに変わってしまうのです。そこで自分たちの暮らす地域の里山の風景や自然をまもるために、結成されたのがこの会です。会員の方はみなさん、ボランティアで清掃や植物の手入れなどの活動をしています。管理といっても人の手を加わえすぎず、自然のじゅんかんや、生き物同士のつながりをくずさないように気をつけている事を教えてもらいました。

（丸山　雪音）

こんな所に絶滅危惧種

実はこの日野市内にも絶滅危惧種がいます。例えば、オオムラサキやヤマトリカブト（キンポウゲ科）やキツネノカミソリモガンバナ科等です。里山では、絶滅しそうな木を、くいで囲んで保護したり、雑草を切っている時に間違えて切らないように赤いテープで目的を付ける等の工夫をしたりしています。そしてエノキは、それほど絶滅しそうにないのにくいで囲んでいます。なぜならエノキの葉はオオムラサキの幼虫のエサになるからです。里山にある木は一見同じように見えるけど、実はいろいろな種類の木が生えています。木の見分け方は、幹の表面を観察したけさわったりすると分かります。

（大後　京一郎）

振り向けば外来種

里山には、様々な植物や動物が数えきれないほど、生息しています。この多くの動植物を守っているのは、枯れ木や落ち葉などです。枯れ木は、虫が冬みんするのに、いいねどこになっていて、その虫を鳥が食べにくるので、多くの鳥が、この里山に集まってくるのです。落葉は、カブト虫などの幼虫のエサになります。その幼虫がフンをすることで、落葉は分解され、たい肥になります。それを土と混ぜて、それを肥料として、畑にまいています。これを自然の循環といいます。しかし、その多くの動植の中に外来種がいます。その外来種が、この生態系をくずしているのです。この生態系がくずれることによって、木が育たなくなったり、そのえいきょうで落葉や枯れ木が少なくなって、虫が冬みんする場所がなくなって、虫が死んでしまって、鳥がこなくなったり、幼虫が食べる落葉がなくなって、幼虫のフンがなくなって肥料ができなくなって、畑の野菜が育ちにくくなってしまいます。だから、外来種は里山に入れては、いけないと里山の人は、言っていました。

（田辺　悠世）

⇑ 去る１月１５日、日野市立七生緑小学校の６年生の総合的な学習の一環で里山を案内しましたが、そこで学んだことを新聞にしてくれましたので転載します。（ちなみにここで「オオムラサキ」は確認できていません。　事務局）

稲藁（わら）の記憶

水越　律子

昭和３０年代の半ばまで田んぼは手植え・手刈りでした。籾を収穫すると、藁はいろいろに利用されました。農作業が忙しい時は幼子は、藁で編んだ保温力たっぷりの籠で過ごします。今でも「いづみこ人形」の名前で売られています。冬支度に藁蒲団がありました。すいた藁の柔らかい部分をたっぷり入れてマットレスとして使用します。家の土間には牛が同居していて牛の餌、小屋敷としても使っていました。納豆も手作りで、もちろん苞は藁。食の補助、土の培養 保温、浄化等に役立つのですね。

時代は機械化が進み稲藁の入手が難しくなってきて、畳屋さんが探し回っていました。最近、昔ながらの農作業に参加する機会があり、いかに藁の力が優れているか、普通に藁を利用していた時代を懐かしく思いだしました。藁ぞうり、藁ぐつ、俵、等々もありましたね。生まれ育った山形の思い出はいっぱいあります。

里山の会の活動には何度か参加しましたが、山仕事の後の料理が美味しかったです。特に椎茸と春雨の中華風スープが印象に残っています。どなたかの手作りの赤かぶの漬物も絶品でした。また行ける時は里山でのお手伝いをしたいと思っています。

「おから」で贅沢野菜

田村はる子

質が良く美味しいお豆腐でお馴染みの、高幡不動近くにある三河屋豆腐店さんより、当会では毎週月曜日におからを頂いています。大豆の栄養分をふんだんに畑に入れられることは何とありがたいことでしょう。そのおからをどう使えばよいのという質問がよくあります。おからだけだと水分が多いので、米ぬかを混ぜてさらさらの状態にします。米ぬかには善玉菌が棲んでいて、おからが菌のエサになり、発酵してきます。それを元肥や追肥として、株元、葉の上から撒きます（葉面撒布）。すぐ発酵して熱を持つので、そのまま撒いてよいものか、この点を心配する方が多いのですが、私の経験では撒いて大丈夫です。昨年はその追肥を３週間に１度ずつやりましたが、トマト、ナス、ピーマンなど、化成肥料を一切使わず、霜が降りるまで次々と収穫できました。良い菌が土（おから）の中に棲んでいるせいか、雑草の中でも野菜たちはとにかく元気で、病気にもかかりません。

元肥として使用するのは、米ぬか、おから、牛ふん、カキ殻石灰か草木灰、それに雑草を乾燥させたものを土に混ぜます。雑草は太陽の光をいっぱい浴びて育った栄養価の高いものなので、積極的に利用し土に返します。

善玉菌は土壌の表面近くに棲んでいるので、深く耕さず１５cmほど上側をかき回すだけです。しかも作物の株元と作物より高い草を抜いて光が入るようにする程度で、雑草はあえてある程度残しておきます。雑草の１つ１つが違う菌を持っているらしく、単作よりも生物多様性が保たれるからこそ病気に強いのだと思います。ハーブ類との共生（混植）も良いようです。

今年も大好きな春が巡ってきました。待ちに待った野菜つくりの季節、安全なおからを使って自然の中で思いっきり土と戯れる生活を楽しみたいと思っています。

１～３月の主な活動記録

1/15（日）　日野市立七生緑小の６年生が総合的な学習の一環として見学に来訪。地域社会と環境保全について学びました。（P3参照）

1/18（水）　第２緑地の高木伐倒・枝下ろし他、日野市みどりと清流課との協働にて。（20名参加）

1/21（土）　天候不良のため中止

2/ 3（金）　NPO法人苫東環境コモンズと北海道開発協会の研究所から遠路来訪。新しいコモンズという視点から現地を案内・説明しました。（P2参照）

2/11（土）　長久保緑地周辺の落ち葉清掃・倒木処理・万蔵院台丸木橋補修・アリスの丘の梅剪定他（50名参加）　日野市と市民による市民協働事例集（仮称）の作成にあたって、市民と市職員が市民活動の参考事例として取材に来訪。（P1参照）

2/22（水）　タラの丘・第１緑地の境界杭の更新・落ち葉掃き他（30名参加）

3/18（日）　万蔵院台・第２緑地落ち葉掃き・アリスの丘のブルーベリーネット拡張他（35名参加）

４～６月の主な活動予定

各回の持ち物：バンダナ、手袋、飲料水、Ｍｙ食器等

各回とも１０：００　炭焼小屋広場集合　雨天時翌日

（緑地の状況により内容を変更する場合があります）

4月22日（日）　恒例春の見学･散策会。日の出町で活動している「ＮＰＯ花咲村」をマイクロバスで訪ねます。倉沢と似た活動をしていますがフィールドはかなり広い範囲に散らばって、山、畑、田んぼと多彩なので面白いと思います。拠点のログハウスでお話を聞いてからフィールドを見せて頂きます。帰路には秋川ファーマーズセンターにも立ち寄る予定です。

（無料・事前申込み制・お早めに事務局へ）

※ 9:15　第１緑地駐車場（弁当持参・小雨決行）

5月19日（土）　タラの丘・畑の周囲ほか草刈り、その他（ミネストローネ）（9:00～刈払機の基礎講座）

6月16日（土）　長久保緑地下草刈り・第１緑地崖面の草刈り、その他（トン汁）（9:00～刈払機の基礎講座）

☆☆☆☆☆　事務局から　☆☆☆☆☆

☆倉沢里山を愛する会の活動も 13 年目に入りました。何とか続けてくることができたのは皆様のお蔭と感謝しています。新しい年度もよろしくお願い致します。

☆アリスの丘の梅の木の下に、三河屋さんのおから、里山産の木灰、その近くの堆肥床には百草ファーム大木さんの牛ふんが入れてあります。会員はご自由にお使い下さい。米ぬかは、近所のコイン精米所でただで入手できます。雑木林の落ち葉の腐葉土、家庭の生ゴミや畑の雑草も上手に使って、地域全体でのエコ循環を会員の手で実践できるのは素晴らしいことですね。

☆アリスの丘の梅の木の下に「リュウノヒゲ」の株が置かれています。傾斜地の土留めに最適な植物です。木材や金属等より、景観的にも良いですし何よりエコです。すぐに定着しますので是非ご活用下さい。